

大伴黒主 – 悪評を残しながら神に祀られた歌人

藤原 道夫

大伴黒主は平安時代の歌人で、六歌仙に名を連ねている。しかし 36 歌仙に漏れているし、百人一首の歌人にも選ばれていない。次のような歌を詠んでいる。

春さめのふるは涙か桜花 散るを惜しまぬ人しなければ (古今和歌集)

道のべの 便りの桜折り添えて 薪や重き春の山人 (同上)

黒主の歌風について、紀貫之は『古今和歌集』の序で「大伴黒主はそのさまいやし。いわば薪負える山人の花の陰に休めるがごとし」と評している。また、能『草紙洗』にあるような悪評も残っている。それにもかかわらず後世明神に祀られる。

この歌人の名を、好むと好まざるとにかかわらず、聞かされてしまう場面に出逢った。

仙洞御所にて ここは天皇が退位した後に住まう所で、今は京都御苑内に庭園のみ残っている。そこを何度となく参観した。紅葉が特によい。毎回説明を受けるのが「草紙洗いの石」について。黒主は小野小町の歌を盗み聞きし、それを草紙に書き留めて宮中の歌合わせ会に参加した。小町が自分の歌だと言うと、古歌だと主張する。小町の要請により草紙が池の水で洗われると、新しく書き入れられた歌は消えて盗作がばれてしまう。小町の機転により、大した咎めがなかったようだ。この逸話は能『草紙洗』として演じられる。草紙を洗う人が足場として使ったとされる三畳敷きほどの赤っぽい平石が庭園の池のほとりに残っている。

余談だが、ここには柿本人麻呂神社がある。

能『志賀』を観る 志賀山は吉野山や嵐山とともに桜の名所として知られていた。能『志賀』には山桜の美しさが讃えられていると聞き及び、観に出かけた。

天皇に仕える臣下二人が志賀山を訪ねる。山桜が満開の候、花吹雪が琵琶湖に向かって流れ落ちてゆく光景が謡われる。(私には吉野山で見た谷に向かって桜吹雪が舞い降りてゆく光景が思い出される) シテが桜の枝を挿した薪を背負う老人として登場し、木陰で休む。臣下が老人の姿を認めて話しかけると、自分は大伴黒主であることを示唆して消える。後半に黒主が志賀明神として現れ、泰平な世の花の景色を讃えつつ神楽を舞う。

有名人を神に祭り上げる例は多い。それにしても悪評を残した歌人を明神に祀るのは釈然としない。しかし祇園祭の黒主山鉾として今なお名が残っているので、それなりの理由があるのだろう。